

▽悪口歌の応酬

3840 池田朝臣いけだのあそみの、大神朝臣奥守おほみわのあそみおきもりを嗤わらへる歌一首「池田朝臣の名は忘失せり。」
寺々の女てらでら餓鬼めがき申おほみわさく大神をの男が餓鬼きたば賜りてその子う生まはむ

3841 大神朝臣奥守おほみわのあそみおきもりの、報こたへ嗤わらへる歌一首
仏造ほとけつくり真朱まそほた足たらずは水溜みずたまる池田いけだの朝臣あそが鼻うへの上うへを掘ほれ

○西本願寺本

池田朝臣嗤大神朝臣奥守歌一首 池田朝臣
右忘失也

3840 寺々の女てらでら餓鬼めがき申おほみわさく大神をの男が餓鬼きたば被給かきたり而其子そのこ将播しやうは

大神朝臣奥守報嗤哥一首

3841 佛造ほとけつくり真朱まそほた不足みずた者水溜みずた池田いけだ乃阿曾あそ我鼻わのあそ上うへ乎穿うへ才礼さいらい

【右注】

*池田朝臣：大神朝臣奥守が従五位下に昇進した天平宝字八年（764）の十月に「従八位上池田朝臣真枚」という人物が従五位下を授けられている。もしこの人物だとすれば、彼は宝龜五年（774）三月に少納言（従五位下）、延暦六年（787）二月に鎮守副將軍に任ぜられて、同延暦八年（789）、征討將軍紀古佐美に從つて蝦夷征伐を行ない、敗退している。そのときの戦場は奥州の胆沢（岩手県）、敵対した蝦夷の將軍はアテイル（阿豆流為）。

*大神朝臣奥守：続日本紀に、天平宝字八年正月に「正六位下大神朝臣奥守」に従五位下が授けられているが、そのほかは不明。大神氏は大三輪氏とも表記した。大和の古社、三輪山の神を祭る氏族である。

*嗤：あざ笑う意。

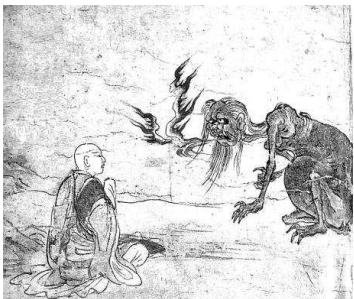
岩崎美術社刊『国宝絵巻 地獄草紙・餓鬼草紙』より
京都国立博物館蔵『餓鬼草紙』（十二世紀）

【語釈】

*餓鬼：仏教の用語。生前の悪行や食欲によって地獄の一つ餓鬼道に落ちた者。喉の穴が細く、食べ物を飲み込むことができないため、空腹に耐えきれず、痩せこけてお腹がふくらんだ醜い裸体で描かれる。古代寺院にはその像が置かれていたらしく、巻四・608番にも「大寺の餓鬼」とある。

*申さく：願ひ申すことには。

*大神の男餓鬼：奥守が痩せていたからであろう。



お寺のあの女の餓鬼と似合いの夫婦だと皮肉ったのである。もちろん、餓鬼は出産などできない。

*生まはむ：「生まふ」（「ふ」は継続を表わす）＋「む」（意志を表わす助動詞）。生み続けましょう。ただし原文には「將播」とあって古くは「はらまむ」と読まれてきた。この訓みも捨てがたい。さらに、中西・講談社文庫本では「播」をマクと読み、「その種子まかむ」とする。

*真朱まそほ：古くはアカニと読まれてきたが、古義は、次の巻十四・3560「丹生にふのまそほ」などの用例からマソホと読む。古代の朱色の顔料に用いた赤土。また、次の歌からすると、金きんを精錬するための水銀を取る辰砂しんしゃと呼ばれる硫化水銀でもある。目立つ赤色の鉱物。

3560 真金まがね吹く丹生にふの真朱まそほの色いろに出て言いはなくのみそ我が恋あふらくは（巻十四）

（金を取り出す産地の丹生から出る真朱のように鮮やかにはつきりと言わな

いだけのこと、私はとても恋しく思っているのだよ。）

真朱は仏像に鍍金するときに用いられた。

*水溜まる：「池」に掛かる枕詞。水が溜まる場所の赤土を掘るのは大変だけれども。

*鼻の上：池田朝臣の鼻が赤かったことから戯れたのである。

【総釈】

なんとも大人げない悪口歌の応酬である。現代では、本人のせいではない身体的特徴をあげつらうのは良くないことであるが、奈良時代の下級貴族の日常場面をほうふつとさせる歌である。前歌の新田部親王のヒゲの歌と同様、顔の特徴まで歌われていて、漫画にできそうな歌である。

参考図：奈良時代の人物像

東大寺の写経所の落書き



池田朝臣にひやかされた大神奥守はかなり痩せ型の男であった

ようだ。餓鬼道地獄に落ちた「餓鬼」の姿は、全身骨だらけの裸体で描かれるが、空腹のためにお腹だけが異様に膨れた様子であることから、池田朝臣は女性の妊娠を連想してこの歌を作ったものらしい。

大神奥守は、池田朝臣が仏教関係の語句でひやかしたので、彼の赤鼻の特徴を同様に仏教に関連した仏像との関係で言い返したわけである。マソホは仏像に塗る赤色顔料ととってもいいが、また鍍金するときに使う辰砂とも考えられる。東大寺の大仏（天平勝宝四年752開眼供養）を造ったとき、鍍金のための金が足りず話題になったことはよく知られている。鍍金するのは金とともに辰砂も多く必要だったはずだから、大神奥守の歌は当時のそのような話題を連想していた可能性もある。

池田朝臣氏は『新撰姓氏録』によれば上毛野朝臣と同祖とあり、上毛野朝臣は始祖伝説によれば渡来系氏族と思われるから、池田朝臣もおそらく渡来系であろう。歌の作者

の名前は忘れたとあるが、悪口を言い交わす関係からみると大神朝臣奥守と同じ年に少し遅れて従五位下となった真枚という人物ではないか。池田朝臣真枚ならば、陸奥の鎮守副将軍にも任ぜられていて、武門の家である大伴家持とも関連があるから、名前を忘失したと書くのは不自然で、理由は分からないが意図的に明かさなかつたのではないか。

「猿の尻笑い」あるいは「おまえの母さん出陣」

悪口歌がもてはやされたことがあつたと見えて、巻十六には、さらに次の別伝の一组を掲げている。

3842 平群朝臣の、嗤へる歌一首
小兒ども草はな刈りそ八穂蓼を穂積の朝臣が腋草を刈れ

*八穂蓼を…たくさん穂が繁る蓼の意で「穂積」に掛かる枕詞。また、蓼は、歌の分脈上、刈り取られる雑草としても意味を持つている。
*腋草…漢字の表記から見れば腋毛とも考えられるが、「腋臭」の意でワキガだとの説もある。

3843 穂積朝臣の、和へたる歌一首
いづくにぞ真朱掘る岡薦 豊平群の朝臣が鼻の上を掘れ

*薦豊…平群に掛かる枕詞。「薦」は筵などを編む水草のマコモを指すが、同時にマコモで製した敷物をも指す。その敷物を重ねたものが「薦豊」。また、敷物をめくる意で平群の「へぐ」（はぐ）に続く。

この別伝も、鼻が赤いことを笑う歌が返歌になつている。これはどういふことだろうか。一つの見方としては、自分の欠点を棚に上げて他人をそしめる者の滑稽さを表わしているのではないか。第三者から見ると、まさに「猿の尻笑い」である。

大舎人たちの戯(ぎ)れ歌

3844 黒き色を嗤咲へる歌一首
ぬばたまの斐太の大黒見るごとに巨勢の小黒し思ほゆるかも

3845 答へし歌一首
駒造る土師の志婢麻呂白くあればうべ欲しからむその黒色を

右の歌は伝へて云く、大舎人土師宿祢水通、字を志婢麻呂と曰ふもの有りき。時に、大舎人巨勢朝臣豊人、字を正月麻呂と曰ふものと巨勢斐太朝臣(名字は忘れたり。嶋村大 夫の男なり)と兩人並びに此彼克黒色なりき。是に、土師宿祢水通、斯歌を作りて嗤咲ひければ、巨勢朝臣豊人之を聞きて即ち和ふる歌を作りて酬へ咲ひき、といへり。

*大舎人：前述のとおりで、律令に規定された中^{なかつかさ}、務省の職員で、左右の大舎人寮に属し、定員は各八百人。宮中に宿直して雑事に使え、天皇の行幸のときは行列に付き従った。大伴家持は「内舎人」だったことがあったが、内舎人は中務省に直属する舎人で定員は九十人。

*大黒、小黒：契沖は、「黒」は馬を意味するのだろうという（代匠記）。また、^{こせノひだノあそみ}巨勢斐太朝臣に掛けて「斐太の大黒」と言っているのは、飛騨地方産の名馬を思わせているとも解されている。

*土師宿祢：土師は昔から古墳の周りに立てる埴輪を製作してきた人々で、それを管轄した氏族。人物埴輪や馬の埴輪も作られた。

このような大舎人たちの集団の中でもさまざまな歌にまつわる噂があったのである。ことに宴席などでは、こんな歌の応酬をして、たあいもなくお互いに笑いあったのではないだろうか。笑いの対象になっている人物の字（通称）が書かれている点も、こんな戯れ歌が歌われたのが、気楽な集まりの場面でのことだったからと思われる。

成り上がり者の身体的特徴をあしざまに歌にうたつて憂さを晴らした平安貴族の話よりは、明るい笑いが響いているように思う。たとえば『平家物語』の「殿上の鬨討ち」に語られる平忠盛の逸話では、忠盛が舞をまっただとき貴族たちが、「伊勢瓶子（へいじ）は酢瓶（すがめ）なりけり」と歌って嘲したという。平忠盛は伊勢に勢力を張ったので伊勢平氏と呼ばれていた。また、彼は斜視だったことから、貴族たちは彼のことを当てこすってこんな掛け詞の歌で嘲したのであった。ブラックユーモアである。